

そして少年は世界を救う

如月誠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2039年

ロストクリスマススの脅威から10年が過ぎたこの年、再び物語の歯車が動き出す。

最近天王洲第一高校に転校してきた桜満集には秘密がある。

それはこの年で軍に所属し、世界中のテログループから「神速」の名で畏れられているということだ。

今の軍の方針に不満を抱いていたある日、父が研究していたヴォイドゲノムが葬儀社というテログループに奪われた。

その気無しに行方を追っていると、追った場所で櫟いのりと出会った。

彼女と接している内に、本心と義務が対立し、困惑していくが…

目次

僕の願い	1
邂逅	3
それぞれの思惑	15
君に託す罪の王冠	32
些細な約束	37

僕の願い

午前1時40分

都内にあるマンションの一室に電話のコール音が鳴り響く。こんな時間帯であるため、その部屋にいる住民は当然就寝中であつたが、
敢えなく起こされてしまった。

もぞもぞと起き上がり目的のモノを手に収めると、その端末を耳にあて気だるげな声を発した。

?? 「……………はい」

電話の相手は彼が不機嫌であるのを感じ取るが、緊急事態なので情報を素早く伝える。

「**少佐、大変です！本日1時30分にGHQの支局が襲撃されました！その際に葬儀社を名乗るテロリストグループが最重要機密のモノを盗んだ、という伝令が入りました！」

?? 「最重要機密…？ ハア、僕が担当しているヤツじゃないか」

「そうです。ですので至急本部までお越しになるよう命令が降りていきます」

?? 「んー、大体の事情は分かった。今からそつちに向かうから」ピッ

そこで電話のやり取りは途切れた。

全くあの中佐は…等と安眠を妨害された怒りを監視不屈き者に向けてる。

大体、これで僕に「立場から考えて私が夜勤務はおかしい！」と言えた立場か考えて欲しい。

少年は未だ布団を恋しがる身体に鞭を打ち、特に急ぐ様子もなく着

替え始めた。

?? 「ダルい。ってか寝てたい」

というのも、今から自分が行った所でその最重要機密が戻ってくる訳でもなく、ただ問題の後始末をつける書類がわんさか渡され、その中佐が懲戒処分になるのを横から黙って見ているだけなのだろう。

(まあそれはそれで面白いが)

それにこんな事を言うとおれだが、僕個人は『アレ』が盗まれる事を別に嫌な事だとは思ってもいない。いや寧ろ盗まれる事を願ってたくらいだ。

だつてそうだろう? 『アレ』を作った人は世のため人のために寝る間を惜しんで、それこそ身が粉になる思いで研究していたのだ。それがただ軍の中で大事に守られているだけなんて報われない。もつと実用すべきだ。少なくとも僕はそう思う。

そして記憶は無いが、『僕の父さん』もそんな僕と同じ気持ちなのであろう。

2

?? 「とは思うけど、その盗つ人を捕まえるのが僕の役目だから何とも言えないよね。ま、精々『軍人である時の僕』とは会わないよう頑張つてよね、葬儀社の皆さん」

少年はドアを開け、暗い夜の町に入り込むと、その闇と溶け込んで姿を眩ました。

―都内のどこか―

?? 「大丈夫だよ、ふゆーねる。これはちゃんと涯に届けるから」
ふゆーねると呼ばれた白い物体を撫でながら呟いた少女の肩は血で濡れていた。

そして、その彼女の手には紅い二重螺旋を描いたモノを収める容器が握られていた。

邂逅

「ふあああ〜」

天王洲第一高校へと向かうモノレールの中で、桜満集は大きな欠伸をした。いつもなら暇なこの時間を使って本を読んだり勉強したりするのだが、この日は睡魔に勝てず立ちながらウトウト揺られていた。

「もう、集！起きて！周りの迷惑になるから！」

尤もな事を言うこの少女は校条祭。一月ほど前に転校してきた集と最初に話しかけてくれた少女で、彼と仲が良いグループの一人だ。しかし、今の集にこの言葉は辛い。

集「うう、勘弁してよ祭。昨夜は全く寝付けなかったんだから」

祭「何で？また映画でも見てたの？」

集「うん。この前颯太が薦めてきた映画が寝るときまで頭離れなくてさー」

祭「それってホラー？」

集「いや、感動ドキュメント。主人公のお母さんが僕の親戚の叔母さんと似てたから」

祭「ふふっ、何その理由」

集（嘘だけど）

魂館颯太

祭と同じで仲よしグループの一人で、よく僕にそういうのを教えて来たりとかしてくれる。

だが、彼の薦める作品は良い悪いの差がハッキリしているからこーやって徹夜することも少なくない。

(まあ今回は違うけどね)

祭「それにしても、やっぱり今日軍の車多いよね」

集「どしてダロネ〜」ギクツ

集(僕は関係ないから)

学校に来るといつものように颯太の元氣やかましいな挨拶が飛んできた。僕はそれをヒラリと躲す。

それでも気にしない様子で話しかけてくる彼には毎度の事ながら呆れるが。

颯太「なあ集、EGOISTって知ってるか!？」

集「えっ!?あの颯太がアルファベットを使ってる!」

颯太「お前は俺を何だと思ってるんだよ!そんなくらい分かるわ!」

颯太「じゃなくてEGOISTだよ、EGOIST!」

集「エゴイスト:自分の事だけしか考えない人。利己主義者。要は自己中」スラスラ

集「舐めないですよ。これでも前のテストは1位だったんだからさ」ドヤア

颯太「そつちじゃねーよ!今流行りに流行ってるバンドグループだぞ!本当に知らないのか!？」

集「:」ウーン

集「知らない」キツパリ

真顔で言い切った。

これで颯太の勢いは完全に止まった。口をパクパクしているが次に出る言葉はないようだ。

八尋「まあ落ち着けよ颯太。集だって俺達と話題合わせるために夜

通し頑張ってるんだからさ」

花音「そうだよ！一月前までアメリカで暮らしてたんでしょ？それに強制することもないでしょ、それ？」

二人が言うように集は実際アメリカで暮らしていたし、此方の文化がそれほど良く分らない。

だからこそこの現代映像文化研究会なるものに入ったのだ。（親しみ深い人が多いからでもあるが）

颯太「でも知らないのは勿体ないから俺ので聞けよ！絶対ハマるぜ
〜！」

集「ん〜、いやイイ、眠いし。というわけでちよつと寝るから授業前には起こして」

颯太「え!?!ちよつと待てよ一曲くらい…！」

集「zzzz」

颯太「つて寝るの早っ！」

最後まで集に颯太の熱意は伝わらずにその場は終わるのであった。

集が颯太から渡されたパネルを受け取らずに済んだ事に、祭は少なからずホツとした。

それもそうだろう。

EGOISTのボーカルである樫いのりは歌も去ることながらそれに見合うだけの容姿も持ち合わせている。

街中で彼女を見かけようものなら例え彼女を知らなくとも声をかけたくなるほどの美しさだからだ。

この見た目であるどこか不思議がかった唄を自分が歌えたならと心底思う。

もし、ここで彼が彼女に魅せられてしまったら、と思うと彼女は気がなくなるだろう。

だから、その時は集が彼女の知っている集で良かったと思えたのだ。

昼休み

結局1〜4校時全てを犠牲にした集だったが、お陰で眠気0の状態に持ち直す事が出来た。

その状態で教室を抜け出すと、近くの廃校舎に向かっていた。手には持参したおにぎりを3つほど持っている。

別に毎日ここで自作している映像を弄りながら飯を食べているわけではない。

ただ、こうした方が良いという集の気まぐれだ。

廃校舎について目に止まったのは外から入り口、そして中へと入っていく一列の血の垂れた跡だ。

集はそれを特に驚いた様子も見せず横目で眺めて自らも中へ入ろうとした。

その自然過ぎる行動が逆に不自然であるが、本人はそれを当然として捉えている。まるでここに何があつて、これからどうなるかが分かっているみたいだ。

だが、そんな彼の手もドアに手を掛けたところで止められた――

誰かに手を抑えられたのではない。集自身が止めたのだ。しかし集は、見えない何かが自分を引き留めたのだと一瞬だけ錯覚した。

人から忘れられた、寂しい廃校舎は今、神秘的な唄声に包まれている。

少女は昨晚の時点でこの廃校舎に身を潜めたのだが、止血と報告を済ませている内に夜が明けてしまい、日没までここに居座ろうと考えた。

お供に添えられたふゆうーねるの中にある容器を見て安心すると同時に、見つかるが先か、夜になるのが先かという不安がつき纏う。

「ねえふゆうーねる。私、これを涯に届けられるかな？」

凝り固まった不安が言葉に変わり、それはやがて唄に変わっていった。多少危険かもしれないが、今の自分を支えてくれるのはこれしかないと感じていた。

近くにいないと聞こえないくらいの音量だし大丈夫、と思っていると、後ろから何かがつづかる音が聞こえたー

「?!」バツ

そこにいたのは制服姿に身を包んだ学生だった。手には小さい箱のようなモノを持ち、部屋の入り口で立ち尽くしていた。

その少年はポーと自分の方を眺めていたが、やがてフツと優しい笑顔に変わった。

集「綺麗な唄だね、感動したよ。僕は桜満集。君は？」

温かい、穏やかな陽差しのようなその笑顔に魅せられてか、少女は内心彼への疑念を捨てていた。が、外面はあくまで警戒した風を装っていた。これも涯からの教え。他人をあつさり信用するなという事だ。

私が答えないことで生まれる沈黙に耐えかねて集が言葉を発しようとした時、

ぐうぐう

私の腹が鳴った。

集「…」

「…」

集「…おにぎりだけど、食べる？」

「／／／」コク

警戒心は空腹と羞恥心には勝てなかった。

集におにぎりをご馳走してもらった後、いのりはふゅーねると戯れていた。

ここまで彼の動向を調べていたが、特に怪しい動きは無かったのでいのりは彼を安全と認識した。

集「ねえ、それで答えがまだだったんだけど…君は何て名なの？」

いのり「いのり。樫いのり」

集「樫さん…か」

集（今度は随分素直に答えてくれたな）

いのり「…知らない？」

集「ん？」

いのり「私の事…知らない？」

集「…？えーつとゴメン、何処かで会った事あるっけ？」

いのり「そう…知らないのね」シユン

集が自分を知らない事が少なからずいのりを落胆させた。涯にやらされて始めたとはいえ、いのりは自分の唄には自信を持っていた。それを裏付けるかのように、ネットでは彼女についてで持ちきり

だ。(そこに唄以外での話題があるのを彼女自身は気付いていないが)

それがまさかターゲットにしている層の人間に知られていなかったので、こうして柄にもなく感情を外に出している。

集「ゴ、ごめん」

いのり「ううん、良いの。これから先もつと頑張るから」

集「樫さんは前向きなんだね。羨ましいよ」

いのり「……恐いの？」

集「え？」

いのり「前に進んでいくのが、恐いの？」

集「…」

いのり「桜満集は、臆病な人？」

集「ハハツ、そうかもね。僕は臆病なのかもしれない」

いのり「…そう」

二人の間に気まずい空気が流れる。

いのりは、唄こそが自分を人であると認識できる唯一のものだと考えている。歌っている時は自分をさらに出し、感想を言われると胸の内が温かくなる。いのりはその感覚が大好きだ。

だからもう一度その温かみが欲しくて頑張れる。前向きになれる。人は皆、誰かに誉められると嬉しくなり、それを得ようと前向きになれる。

人である時の自分と、人誰かを殺す殺す時の自分とは心の在り方に大きな差がある。

涯に命じられるのが嫌なわけではない。

ただ、自分にとっての1番は誰かに誉められ、そのために前向きであり続けようとする事なのだ。

しかし目の前の彼は前に出ることを拒んでいる。怯えているようにも見える。

だから…

いのり「とって」

集「…え？」

あや取りで作った橋を彼の前にかざす。

いのり「やれば、できるかもしれない。

でも…やらないと絶対にできない」

集「やれば…できる？」

いのり「前に進むことは恐いかもしれない。けど、進まないとも
得られない」

集「…」

集「ゆずり…」

バン！

集いのり「!?!」

入り口の扉が盛大に開け放たれると、白い服を着たG H Qが流れ込
んできた。

集（しまった、僕とした事が…!）

いのり「ふゆーねる！」バツ

いのり「え！ちよっ…!?!」

集が状況を分析していると、いのりが格子を跨いで二階から飛び降
りた。

言われてふゆーねるも動こうとするが、ボディが損傷して立ち上が
れないでいた。

いのり「!ふゆーね…ツ！」

「やっと捕まえたぞテロリストが。有名なWebアーティストだから調子に乗るなよ、小娘風情が……！」スツ

倒れているふゆうねるに近づこうとするが、その前に黒人の男に腕を掴まれた。

「やれ」

近くにいる兵士に合図を送ると、その兵は銃の持ち手の部分でいの腹を突こうとするが、それは出来なかった――

正確に言うなら、いのりにぶつかる寸前で誰かがその行為を止めたからだ。

「なっ!？」

いのり「…集？」

集「来て早々女の子の腹を殴ろうとするなんて、お前はそれでも本当に軍の人間か？」

助けたのは他でもない、集だった。

先程とはうって変わって見る者を竦み上がらせるような冷たく鋭い目をしていた。

その瞳には軽蔑、いや、もっと分かりやすく言う道端に捨てられたゴミを邪見にしているような、そんな目だった。

「な、何だ貴様は！学生か!?我々に反抗するならお前もタダでは済まさんぞ！」

集「その言葉そっくりそのまま返してやるよ。勝手に人の管轄に入っただけで随分と間拔けた事を抜かすんだな、グエン少佐」

グエン「!!？」

グエンと呼ばれた黒人はその言葉が余程意外だったのか、顔を真っ青にして押し黙った。

集「大体、お前は昨日の事で」^ヤ「元」中佐と同じく上から謹慎処分を受けていた筈だ。だから俺が呼ばれた。今更この子に何の用がある？」

グエン「キ、キ…」

集「命令違反と規律無視、(俺の)公務執行妨害に加えて緊急発令時以外での非戦闘区域への武器の持ち込みと兵の保持、及び一般市民への脅迫未遂…等々。

とても俺だけでは裁き切れないな」ハッ

グエン「きききき！」

集「今この問題を任せられているのは俺だ。お前を連行する。逆らえばここを出た瞬間”殺す”」

グエン「きき貴様はアアア!!」

集「何だ、証拠が必要か？だったらこれでも見てろ」ポイ

集が投げたのは軍の身分証だ。そこにはこう書いてある。

桜満集”少佐”

アンチボデイズ副局長 及び最高機密保持者。

並びに、貴殿を天王洲第一・第二区間の管轄責任者に任ずる。

集「これを見て異論が有るなら言ってみろ。聞くだけ聞いてやる」
”その場合は殺すがな”というニュアンスを全開に引き出した状態で言ってきた。

グエン「い、いえ…何も無い…です」

これにはグエンも観念したように頭を下に向けた。
その光景を見て、いのりは訳が分からなくなった。

ただ確実に言える事は、自分はGHQに囲まれてしまい、信用に足る人物と思えた桜満集が、この場を取り仕切るリーダーとなった…という事だ。

いのりは集が言う最高機密の在りかを知っている。何とかここから逃げなくては…!

集「逃げようなんて思わないで。君だって無傷のままが良いだろう？」

いのり「…!？」

集には全てお見通しだ。

ならせめて、ふゅーねるを残して自分を含めた全員がこの場から離れば、後で誰かが回収してくれると思った。

だが、それも儚く散るのである。

集「ついでにそのふゅーねるも持ってきて。中に何か入ってるかもしれないし」

「ハッ！」

いのり「ッ!？」

グエンの部下は慣れた手付きで作業に取り掛かる。

最早打つ手が無かった。

ここで戦闘して間違って目的のモノを割ってしまう可能性もあるので下手な抵抗も出来ない。

「捕獲した女とこの物体は如何しましょうか」

集「女は第四隔離施設に収容。ふゅーねるはそこで僕と嘘界少佐で解体に当たる」

「分かりました」

集「よし、出るぞ」

ふゆーねるを兵士の一人が持ち、いのりとグエンに手錠が掛けられた。

余程屈辱なのだろう。集といのりの耳に「ウイルス菌が」等と罵倒が聞こえてきたが無視した。

集「…！ チツ、やっぱバレてたか」

外に出ると数十人を越える生徒が廃校舎の周りを占拠していた。人目に付かないとはいえこれだけGHQが押し掛ければイヤでも目につくだろう。特に昨晚の襲撃の後では。

集「樫、これ被つとけ」

いのり「えっ？」バサツ

集が渡してきたのは彼の制服だ。

生徒の横を過ぎる際に、集がいのりのため生徒から気付かれないうにするためのモノだろう。でも何故？集はここの生徒なのだから、彼が被った方が良いに決まっている。

実際、集を知っている人間から集の名が飛んできている。この中に彼が軍の人間だと知っている人間は居ないのだろう。

「ホラ、とつとと歩け！」

それでもいのりがピンチなものには変わり無く、集に言われるがまま第四隔離施設へと連れて行かれた。

それぞれの思惑

六本木ー

ここは東京に位置する、元は人で賑わいを見せていたかつての名所。だが10年前に起きたロストクリスマスの影響でここは封鎖。一般の民間人はまずここに立ち寄らない。ここにいる人間は二種類。死んだように生きる住民と、生葬儀社きる者達だけだ。

そう、この地下には今日本を騒がせている葬儀社のメンバーが活動している。それはこの人達にも噂になってはいるが、正確な情報は誰も知らない。

ー葬儀社アジト、オペレーター室ー

「涯、いのりんが旧校舎に入って行ったけどどうするの?」

涯と呼ばれた金髪の男の他にも、ツグミ 四分儀 綾瀬 アルゴ 大雲 といった幹部の人間が勢揃いしていた。

モニターには怪我を処置するいのりの姿が映し出されていた。

涯「どうもこうもない、あそこはGHQのど真ん中だ。夜まで待つしかないだろう」

市街地の中心でドンパチやろうものなら、戦力差で此方側に勝機はない。今は黙っているのりと目標物が無事であるのを待つしかないだろう。

アルゴ「あん? 誰か来たみてーだぜ?」

涯「何…?」

涯(!!?)

その姿を目で捉えた瞬間、彼の身体的機能は一時停止する。そして脳裏にかつての彼と自分、そして最愛の人物が共に過ごす情景が浮かんできた。

あの時は彼こそが俺の目標で、憧れだった。

だがロストクリスマスの後、俺はかわった。否、変わらなければい

けなかった―

世界各国を渡り歩き、葬儀社を立ち上げて、そのトップとして在り続けた。今や俺は憧れだった彼を越し、それを導ける存在となった。

涯（お前も変わったな。昔はもつと強かった）

集といのりが話しているのを聞いて、涯はそう思った。いのりの言うように彼は前に踏み出すのが恐いのだろう。前に出過ぎた結果、俺達はロストクリスマスを引き起こした。それが彼の心に恐れとなつて現れているのを彼は痛いほど分かった。だがそれを克服し、それでも前に出た自分とそうでない彼こそが、今この差を生み出しているのだと実感した。

ツグミ「ヤバイ！GHQが押し掛けてきた!!」

ツグミの言葉にハッと意識を戻すと、そこには二人を逃さないための陣形が敷かれ、その中央にはグエンがいる。

アルゴ「よりによってあのグエンかよ!?!いのりが危ねえ!」

四分儀「どうしますか、涯?」

涯「奴の事だ、問題ない。いのりしか見えていないのだろうから、奴らが居なくなつた後ふゆーねると目標物を回収。いのりの救出はその後だ」

涯の読みは当たっていた。いのりを捕らえた事に満足し、ふゆーねるは見えていない。当然そこに奴らの言う最高機密があるとも知らず。リーダーとして、時には非情になることも大切なのは学んできた。

だがそこには誤算があつた。とても大きく、致命的な誤算が―

集「やめろ」ガシッ

アルゴ「な！ アイツ…！」

集は、いのりを殴ろうとした兵の手を掴んでそれを止めたのだ…！
病的な程に自国愛が強いグエンは、日本を「ウィルスの国」と馬鹿にするほどこの国を嫌っている。そのため自分が下に見られるような事をされると、彼は周りが見えなくなるくらいまで相手を痛めつけようとする。

当然の如く集も彼の怒りに触れて、何時手を出すかも分からない状況と化した。

だが、そんな彼の怒りも集が口を開く度に押さえ込まれているように見えた。いや、実際そうなのだろう。

涯を始めとした葬儀社の幹部達も、先程と様子が違う集に少なからず恐怖していた。

そして一通り話が終わると、グエンにあるものを投げつけた。

それは証明証。そこには”少佐”と書かれ、更に”アンチボデイズ副局長”というあり得ない肩書きが並んでいた。

綾瀬「…え…なッ!？」

ツグミ「う、嘘…」

アルゴ「アイツ…！」

大雲「これは、ヤバイです…ね」

四分儀「どうするんですか、涯」

涯「…」

四分儀「…涯?」

涯「あ、ああ。すまない、大丈夫だ。多少の予定外はあったが計画に支障は出さない。必ずな」

「必ず」と言ったところに力が入るが、内心不安でいっぱいだった。

嘗ての友であり憧れだった存在が敵にまわる。おまけに先程のあ

の圧力オラで昔の彼とは似ても非なる事くらいは直感で分かった。

涯（集、俺はお前と争わねばならないのか？だとしたら俺は負けない。今度こそ、俺はお前を越える！）

―第四隔離施設―

集「アンチボディズ副局長の桜満集です。昨夜の件で疑わしい人物、及び数項の条令違反を犯したグエン少佐の身柄を拘束しました。容疑者は独房に、グエン少佐の処罰については後々僕の方から伝えますので、取り合えず今は空いている部屋で軟禁しといてください」

集「それと：嘘界少佐の所までお願いします」
「了解しました」

集は馴れた様子で兵に指示を与えると、そのまま何処かへ行こうとした。だが、去り際に私にしか聞こえない声で

「また後で行く」

と言うと今度こそ何処かへ行ってしまった。
いのりはそれを、心の中で反芻していた。

―応接室―

グエン（クソツツツ!!! 何故この私があんな日本の餓鬼に…!!?)
身柄を拘束されたグエンは内心マグマが溢れ出るかのような酷い憎悪と屈辱に憤慨していた。

グエン（あの餓鬼の事は報告に受けていた！一月前に我が祖国から追い出された害虫だとな！そんな役立たずが真血であるこの私を捕らえようとは…!!!）

グエンの思い種ぐきを知っている者が聞いているとすれば、気持ちいい程に間違っている。

そもそも集はアメリカを追い出されてなどいない。本人の意思で日本に戻り、それと同時にアンチボダイズの副局長の座と天王洲区の大部分を統轄を得たのだ。

未成年である集がここまで権力を付けたのも、それまでの彼の『功績』の裏付けである。

しかし自尊心が強いグエンはそれを受け入れず、規定を無視した結果ここで軟禁されているのだから呆れたものである。

グエン（大体奴が私の処罰を決めるだど!?ふざけるな!!私はそれに従いなどせん!必ずやこの屈辱を倍にして返すぞ!!!）

そうこうしている内に部屋の扉が開き、集ではない長身の兵士が現れた。

「グエン少佐。桜満少佐より伝えられました貴方の処遇についてですが…」

グエンはそこで、驚きの言葉を告げられた。

集「失礼します」

扉を開けると、いつもの薄気味笑いを浮かべた嘘界少佐がいた。局員の皆は彼を不気味だと言うが、僕はそうは思わない。少佐はあんな姿なりでしかも変態だが、中途半端な変態ではないので興味のあること以外ではその非人道的な部分は見せないからだ。

嘘界「桜満少佐、今凄く失礼な事考えてましたよね」

集「さあ?気のせいですよ気のせい。」

それよりも少佐、奪われた最高機密は…」

嘘界「ああ、その事ですが…無いんですよねえ、何処にも」

嘘界はいかにも面白いといった様子で話している。集はそれがかつていたようで、「やっぱり」と心の中で呟いた。

集「無い？ふゆーねるの中にもですか？」

嘘界「ええ。隅々まで探したんですが結果はNOです」

集「そうですか…」

嘘界「おや？ガツカリしました？」

集「別に。仮に奪われてたとしても」^あ鹿^馬中佐に責任が行くだけなので」

嘘界「まつ、そう言うと思ってましたよ」クッククツ

集「じゃあそうなる…やはり葬儀社に先を越された事になりますね」

嘘界「ところがどっこい、どうやらそういう訳でもありませんのですコレが」

集「…？？という事です？」

嘘界「これを見てください。ちょうど7分前に送られてきた映像です」

嘘界はテレビをつけ、そこに録画してあった映像を流す。中身はあの葬儀社が、ここ—第四隔離施設に囚われた仲間と『奪われた目標物』を取り返すためここを襲撃する、というモノだった。集は終わりまで一言も発せず、それを凝視していた。

嘘界「この者は恙神涯。葬儀社のリーダーを名乗る男です。如何でしたか？貴方から見て」

集「…ふーん、コイツがリーダー、ね」

何て事ないと見れる集だったが、内心は違っていた。

集「奪われた仲間。これは樫いのりと城戸研二…だったっけ？その二人を言ってるんだらうね」

集「そして『奪われた目標物』…。これは完璧最高機密のことを言ってますね」

嘘界「そうですね！貴方もそう思いますでしょ!？」

淡々とした答えだが、嘘界はまたもや面白そうに反応する。アンタ年いくつだよ。

嘘界「突如奪われた最高機密。しかし奪ったとされる葬儀社もその行方を知らない…！」

ああ！一体それは何処に消えたんだー!？」

集「五月蠅い。ってかキモい」

この人やっぱ変態だ。そしてあれだな…本当は何処にあるか…いや、『誰が持っているのか』知ってるなこりやあ。ま、別に良いけど。

集「でもまあ、葬儀社が嘘を張^{ブラフ}っている可能性もありますよね、嘘界少佐？」

その言葉に嘘界はクスクスと笑うと、彼も「まあ確かに」と口先だけは同意してくれた。

思った通りこの人は『こつち側』だ。

集「速く見つけないとですねー（棒）」

嘘界「ええ、でないと大変な事になりそうですね〜」

うん。やっぱこの人はとことん悪い奴だけど僕と気が合わないわけではないようだ。

集「あつ、そういえばここ襲撃されるんですけどよね？警備の方はどうなってます？」

嘘界「我々だけで対処するから援軍は受け付けない』、だそうですね」
集「何ともまあ頼りになるお言葉で」

どうせ樫と城戸取られて何も出来ずに終わるんだろうけど…
どうせ、ね。

集「そうだ、使えないグエン少佐を使って後始末させるか…」

嘘界「：貴方、それかなり双方に失礼ですよ？今更ですが私以上のSですね」

失礼な、僕に尋問^拷をやる趣味はない。

これから何が起こるのか分かっている嘘界は、呆れと楽しみが混じった表情で此方を見ている。

今の会話の真意を、(嘘界少佐以外の)分かる人間が聞いていたら僕も牢屋送りになっただろうが、生憎とそんな切れ者はこの室内どころか建物にはいない。

集「そうだ嘘界少佐、樫いのりの事情聴取をお願いしても？」

嘘界「？ それは構わないですが…」

嘘界「私で宜しいのですか？何時もなら貴方がやっているのに…」

集「こっちは昨日の事で滞ってる問題があるんだ。そっちを片付けないと」

「それに…」と言葉を重ねる。それはどこか恥ずかしそうな様子だった。

集「：個人的な事情になるんだが、どうも彼女と話していると調子が狂うんだ。何かここら辺がムズツとする」

そういつて胸を押さえた。原因は知らないが本当にそんな感じだ。
その時嘘界は何かを察した。

集「それでまともな尋問が行えないなら意味無いしな」

嘘界「そうですね！なら彼女は拷問なしで丁重にもてなさないですわね！」

集「あ、ああ頼む？」

集（何でコイツこんなテンション高いんだ？それと拷問を許可した覚えは無いんだが：まあコイツに命令出来る立場でも無いけど）

嘘界（ふふふ。面白いネタが手に入りました♪）

嘘界「それでは！グエン少佐には頑張つて貰うという事で、私は樫いのりさんの事情聴取に行つて来るとしましょう！」

集「ああ頑張つて。僕は書類を片付けてくる」

集（何も喋つてくれないだろうけど。つてかそのテンション止めれキモチワルイ）

周りと放された独房の中にいのりはいた。

彼女は牢から出てきたグエンに目の敵にされ、酷い暴力により身体中に傷と痣が出来ていた。

何でも、葬儀社が自分を助けるためにここへ攻撃を仕掛けてくるらしい。彼はその後で行われる葬儀社の殲滅作戦で指揮を任されたのだと言う。

それを決めたのは他でもない、集だった――

自分では動こうとしない集を「奴は偉そうに振る舞つてはいるが、所詮何かのコネで権威を得た卑怯者よ」、と罵っていたグエンの言葉が耳に入らないくらいに、それはいのりの中で響いていた。

何故会つて間もない、敵である彼がこれ程までに心の中を占めるのかはいのりにも分からない。

ただ、前に進むのを躊躇っていた彼を見ると恨む気にもなれないのだ。

何か彼を苦しめている――
そう感じた。

するとその時、部屋に掛けられていたカギが解かれ、ドアが開かれる。そして兵から出るよう指示されたので、大人しく従った。

嘘界「やあ！どうも、樫いのりさん。映像で見るよりも美しいですわ〜」

連れてかれた先で待っていたのは、葬儀社の間でも「油断ならない」と噂されている嘘界だった。

何故かやたらとテンションが高い。

いのり（集じゃないのか…）シヨボン

嘘界「おやおや、随分と嫌われてしまったようですね。私よりも桜

満少佐の方が良かったですか？」

いのり「うん」

嘘界「そ、そうですか。即答ですか…」

嘘界「まあ仕方ないですね。彼も不思議な魅力を持っていますからねえ。」

何だかガツカリさせたようだが仕方ない。本当に集に会いたかったんだから。

嘘界「それよりもどうしました、その傷？」

いのりの怪我に気付いた嘘界が質問するが、何が起こったのかは分かっている様だ。心底性格が悪い。

いのり「別に」

嘘界「そうですね。お気をつけて」

興味が無くなり本題に入る。相変わらず人を見下したような顔をしていたが、その眼は何も見逃さまいとしていた。

嘘界「それで、貴女には聞きたい事がいくつかあります。全て正直に答えてくださいね？」

『全て正直に』のところではわざとらしく大袈裟に強調したのはそういう事だろう。

嘘界「まず最初の質問です。貴女は葬儀社のメンバーですか？」

いのり「うん、そう」

嘘界「…ほう。随分とアツサリ教えてくれるんですね」

いのり「『全て正直に』言うんでしょ？」

嘘界「よろしい」

クツクツと何が面白いのか分からないが、相手はあの嘘界だ。取り合えず相手のペースに合わせるしかないだろう。

その後も幾つか質問されたが、いのりは滞りなく返していく。「どうしてテロ活動に協力しているのか」という問いにも、「涯がそう言ったから」と答えた。これには流石の嘘界も驚きを顔に出した。

彼女にとつてはそれが当たり前の事で、それを拒むという考え自体起きないのである。

嘘界「では最後です。…の前にこの映像を見ていただきましょうか」

そういつて嘘界が見せたのは、涯がいのりと研二を助けると言っていたあの映像である。

嘘界「さて、事情は分かりましたね？ではお答え願いましょう。最高機密を持っているのは貴女達ではないのですか？」

いのり「…え？」

嘘界「GHQは貴女方から盗まれたアレの捜索を行っています。がしかし、盗んだと思われるいた貴女や、あのふゅーねるとか云うモノからも最高機密は出てきませんでした」

出てこなかった？ふゅーねるから…？

ここまで瞬殺してたいいのりも、予想外の事態に驚くばかりで、結局わけが分からないまま牢へ戻された。

嘘界「という風に、彼女はテログループにありがちな思想に見事に染められています。最高機密」ヴォイドゲノム”の在処については本当に何も知らないみたいです」

嘘界がモニター越しに話しているのはアンチボデイズ局長の莖道修一郎だ。集の唯一の上司にして叔父だが、彼とは仲があまりよろしくない。

その彼が何か有りげな面持ちの嘘界に若干訝しげな視線を送る。

莖道「嘘界。お前は本当に何も知らないのか？」

嘘界「嫌です。ね局長。私を疑うんですか？」

莖道「私がお前はお前は自分の欲の為なら命令などそっちのけで奇行に走る奴だと思っている」

嘘界「ふふ。よくご存じで」

嘘界「が、残念ながらこの問題は本当に私の知るところではござい

ませので」

勿論嘘だ。だが、状況に居合わせていない莖道にそれを反論する材料はないので、通信はそれっきりで終わった。

莖道「クツ!!!」

会話を終えた莖道は苦い顔で机を叩いた。

集「よし出来た…っと!」

最後の書類を片付けて時計を見ると午後5時半を回っていた。

集が予測する限りでは、葬儀社はあと一時間半後に第四隔離施設を襲撃する。あくまで集の勘だが彼の勘が外れる事はほぼ無いので恐らく今回もそうだろう。

戦場の現場となる施設にこれを連絡する事も出来るのだが、何しろ「手を出すな」と言われているので口もつぐんだ。(元々言う気は無いのだが)

集(さてと…樫さんに事情を説明しに行かないとな)

ゆつくりと立ち上がり彼女の元に向かう。心なしかその足取りはいつもより軽いように見えた。

牢へと返されたいのりは先程言われた事に酷く動揺していた。

いのり(ヴォイドゲノムが…無い?)

いのり(ううん、そんな事は無い。私はあの時確かにふゆるねるに

渡してた。没収された時だってそのままだった筈)

それなのにヴォイドゲノムは何処かと言ってきた嘘界を疑う。だがそれをする意味が分からない。

その時扉が再び開かれた。またグエンが自分で憂さ晴らしに来たの思ったが違った。

そこに居たのは彼女が会いたいと望んでいた集だった。集は自分を見るなり驚いた、次に怒りと悔しさを滲ませた表情をしてくれた。多分いのりの傷を見て悟ったのだろう。

集「ごめん、君をこんな目に遭わせて」

そう言ってくれるだけで救われた気がする。やっぱり集は自分が思っていた通りの人だと。

軍人でありながら自分を心配してくれる、優しい彼がいのりは好きだ。

いのり「…集？」

集「怪我見せて。消毒だけでもしとくから」

いのり「うん」

ぐうぐう

いのり「!!」

前に聞いた事がある可愛い音が、この狭い牢屋に響いた。

集「…」

いのり「…」

集「ぷっ！」

いのり「くくくッ！／／／

集「ハハッ！ごめんごめん、別に馬鹿にしたわけじゃないから」

集「…ここのご飯、美味しくないけど食べる？」

いのり「おにぎり？」

集「？ ソフト麺だけど」

いのり「…そう」

明らかに残念そうな顔をして集が持ってきたソフト麺に手を取る。

集のお陰で、いのりは暫しの間だけヴォイドゲノムを忘れる事が出来た。

そう、暫しの間だけだが。

ズルズルズル

うくん、確かにこのソフト麺っていうの、あんまり美味しくない。

集「怪我大丈夫？痛くない？」

いのり「ん、平気。痛みには馴れているから」

集「…そういうの、あんまり良くないよ」

いのり「どうして？」

集「樫さんは女の子なんだから、痛いのは素直に痛いって言わないと」

いのり「いのり」

集「ん？」

いのり「いのりって言って」

集「それ前にも聞いたけど？」

いのり「集がそう呼んでくれるまで何度でも言うから」

集「えー、それはヤダなー」

いのり「嫌なら言って」

集「いや、でも…」

いのり「言って」

集「…えっとじゃあ、いのり…さん」

いのり「さんは要らない」

集「あつ、スミマセン」

いのり「」

集「」

いのり「フフツ」クスツ

集「あつ！今笑ったよね？」

いのり「集：可笑しい」フフツ

集「い、いや：いのりの方が可笑しいから」

そんなこんなで話が盛り上がった。思い返してみると、こんなに楽しいのは部活のメンバーと一緒にいる時くらいだっただろう。

だけどここは牢屋。しかも立場が違う者だと、互いに相手の素性が気になってくる。

いのり「ねえ、さつき集は私に聞いてきたけど、集はどうして軍に入ってるの？」

集「強いて言うなら罪滅ぼし：かな？」

いのり「罪滅ぼし？」

集「うん、これ以上は言えないけど」

仕方ないとは思いますが、もっと彼を知りたいという自分もいる。果たしてどうして私は彼にここまで出来るのか疑問に思った。

集「そういえば、いのりって歌手か何かだったりする？」

いのり「そうだけど：どうして？」

集（ああ、やっぱりか）

集「前に僕に自分を知らないかって聞いてきたし、いのりの歌が凄く上手かったからもしかしてと思ってさ」

いのり「うん：EGOISTってグループでボーカルやってるんだけど：集が知らなかったのはちよつとショックだった」シヨボン

集「へ、へえ。そうだったんだ」
集（それ颯太が言ってたやつじゃね!?)

正しくその通りだ。ここでようやく、集は彼女が颯太の憧れだったことに気がついた。

彼女の事を自己中と勘違いしてたのは言わなくても良いだろう。

集「じゃあさ、君の唄を聞かせてよ」

いのり「え…? 今?」

集「そうだけど…ダメだった?」

別に駄目というわけではない。ただ、ここは牢屋で私は囚人。仲良くしているのを見られては彼の立場が危うくなると思ったのだ。

集「勿論タダでは言わない。君は歌手だからね、相応の見返りはするつもりだよ」

集「例えば…『コレ』を君に返す、とかね」

いのり「……………え?」

集「取り出したモノ。」

それは…ヴォイドゲノムだった。

君に託す罪の王冠

集が「見返り」と言つて差し出してきたヴオイドゲノムに、いのりは（やはりと言うべきか）固まってしまふ。

いのり「どうして……これが？」

ここにあるのだろうか――

だつてこれは、ヴオイドゲノムは行方が分からないつて――

集「君がグエンに殴られる前に、ふゅーねるからくすねておいた」
いのり「え……？」

さも当たり前であるかのように語る彼の真意が読めない。
だつて彼は軍人で、自分はテロリスト。

しかもこのヴオイドゲノムを管理する人間なのだから、尚更私にこれを返す意味が無い。

集「安心してよ。ちゃんと本物だからさ」

そういう彼はやはりあの温かな笑顔で、とても嘘をついているようには思えない。

いのり「でもどうして……？集がコレを渡す意味が無いよね？」

むしろ不利益な事ばかりだが。

集「…君はコレを作ったのが誰だか知っているかい？」

いのり「桜満…玄周博士」

「集のお父さんだよね？」

集「うん、正解。それが答えだよ」

いのり「？」コテン

集「要は誰かに使つて欲しいつて事。折角頑張つて研究したのに、

誰の手にも触れられずただ嚴重に保管されて終わるだけなんて、父さんが報われないでしょ？」

(それだけじゃない…)と、後ではきそうだった言葉をつぐんだ。

集「それに、誰でも良いって訳じゃない。君だからこそ渡せるんだ」
いのり「私、だから…?」

集「うん。体質的に不可能な人も多いけど、僕が言ってるのはそうじゃない。

ここで葬儀社が君を見捨てるような組織だったんなら渡していなかったけど…そうじゃなかっただろ?」

集「葬儀社は君を助けると言ってきた、葬儀社は君を大事にしている。そして君も…葬儀社仲間を大事にしている。

だから君にコレを託すんだ」

集「”ヴォイドゲノムを使うに相応しい”存在としてね」

集はニツコリと、それでいて真っ直ぐな眼で私を見てきた。

いのり「…私が、使うって事?」

集「どうせ使ってくれるなら、父さんが望んでいたような人に、って思ってたからね。

君はそれにピッタリだよ」ハハッ

いのり「でも、これは涯が…」

集「出来ないと言うのなら渡さない。

悪いけど、僕は僕の知らない奴にこのヴォイドゲノムを託す気は無
いから。

やるなら君がやってくれ」

「頼む」とお願いしてきた彼に、私はどうする事も出来ない。

いのり「…うん、集がそれで良いなら」

集「…本当に？」

いのり「」コク

集「分かった。ありがとう…」

散々悩んだ挙げ句、彼の要求を受け入れる事にした。

もしここで否定の言葉をいえば、ヴォイドゲノムは本当に彼の手に戻ってしまうだろう。

もしかしたら、私が断れない状況になったのも彼の作戦なのかもしれない。

でなければ幾重にもなったこの檻は出来上がらなかつたのだろうか。

集「じゃあ君にコレを託す。

葬儀社が襲撃を仕掛けて来るのは多分1時間後だ。その騒ぎに乗じてここから抜け出して来て。

ヴォイドゲノムを使ったら楽勝だと思うし」

いのり「うん、分かった」コクリ

集「外に出たら僕が脱出ルートの手まで送ってあげるから」

いのり「…集は大丈夫なの？」

集「ん？ 僕？」

ふと彼が気になった。副局長という地位にありながらやっているのは重大な反逆行為だ。

見つければ死罪もあるかもしれない。

だが、彼は飄々とした態度でまた温かな笑みを浮かべた。

集「僕は大丈夫だよ。皆自分達の事で忙しいかもしれないしね！」

…が、

(それに…GHQにとっても俺を敵にはしたくないだろうしな)

心の中では見つかつて問題無いような感じではあった。

いのり「集？」

集「ん？ ああ、ごめん。大丈夫だよ」

いのり「無理はしないで」

集「心配ないよ？ 嘘界少佐もついてるし」

いのり「え、あの人も？」

集「うん。まあ味方ではないけど、今回の件だつてきつと分かってるけど邪魔はしてこない訳だし」

いのり「そう…」

集（思ったよりもお人好しだなく、僕の心配なんて。

これだつて罨かもしれないのに）

ま、罨じゃないけど！

なんて言うが、他人の心配してるのは何もいのりだけではないのだが。

集「じゃあ約束通り、君の唄を聞かせてよ」

いのり「うん、良いよ。

ただ、集…」

集「うん？何？」

いのり「いい加減「いのり」って呼んで？」

集「アハハ…やっぱりダメ？」

いのり「駄目」

集「ハア、分かったよ。じゃあよろしくね、いのり」

いのり「うん」／／／

その後、集は何故だか顔が紅いいのりに気付かずに、彼女の歌う唄に心を震わせていた。

曲名は「あなたにおくるアイの歌」

そして集の予告した1時間後―

そこでは今まさに葬儀社が襲撃していた。

些細な約束

第四隔離施設。

そこは文字通りアポカリプスウイルスに感染した人達が周りに影響を与えないよう、患者を保護する、という表の役割と、その裏で被験体を集めて観察、もとい実験を行うという表には出せない非人道的な2つの目的がある。

普段なら閑散とした雰囲気が漂うこの場所も、今は目と鼻の先に設けられたアンチボティズ東京本部が騒がしい為^レに中の職員も患者も——ただし意識は無い——慌ただしく動き回っている。

原因は言わずがな、葬儀社の襲撃だ。

「お、やってるやってる。派手に暴れてるな」

そんな様子を自販の珈琲片手に、場違いなほど呑気に眺めている人物がいる。

——そう、集である。

彼は出撃拒否を強いてきた軍の命令に仕方なく従いつつ、それでもなんか気になるのでこうして安全圏から見守っているのだ。

例えば、その命令を知っているのかそうでないのかは分からないが勝手に出撃^でってる連中が目に入ったとしても、知らないものは知らないのだ。

「咲いた野の花よ

ああ どうか教えておくれ」

特にすることもなく暇なので、さっきいのりから聞かせてもらった曲の中から特に好きだったやつを口ずさむ。

明日にでも颯太の奴が喧しく言うだろうがそんな時は無視だ無視。

——明日学校に行けるかどうかは分からないが——
そうしてまったりしていると、この喧騒の中にも関わらず落ち着きを払ったような足音が集のいる部屋に訪れる。やはり嘘界少佐である。

「この非常事態に鼻歌交じりで珈琲ですか…」

しかもそれが今攻撃中のテロリストグループの一員だというのに」

「不謹慎でしたか？ 意外ですね、貴方はそういうの気にしないと思っただけですけど」

「いえいえ、私はただそれを人前で言うことを禁避しているだけです」「ご忠告ありがとうございます。以後それなりに気を付けます」

「直す気無いですね。まあ良いでしょう」

言われなくても上司の前ではそんなことしない。といつてもアンチボテイズで僕より上の立場なんてたった一人しかいないけど。てか、人に注意しておいて自分は爆破の様子を撮ってるような奴には言われたくないな。

まあそこはお互い様なので此方からは何も言わない訳だが…

「で、何の用ですか？ 一応ここ僕の部屋なんだけど」

「貴方の部屋では無いでしょう。ただ普段ここで仕事してるっただけで」

「表のプレートに『副局長室』ってちゃんと書いてあんだろぅがオイ」

「言葉遣い乱れてますよ」

「おっと、失礼しました」

そんな軽口を叩きながらも、眼はしっかりと現在進行形で破壊されている建物に向けられている。

暫くジツと眺めていたが、僕の珈琲が無くなったタイミングで嘘界少佐が話題を吹っ掛けてきた。

「ところで…今襲撃されている最中の本部の中に、鮮やかな白銀色の大剣を持った少女がいるらしいですよ？」

「ほく、そりゃあまた見てみたいものですねえ。」

貴方は行かなくて良いんですか？ お好きでしょう、そういうの「はい。ですからこれから向かいます。何でも、矢鱈強いらしく、今いる軍だけでは対応しきれないとか云うらしいですよ？」

「そこは頑張って貰うしか無いですね。何てったって『優秀な軍人（笑）』共が沢山いる訳ですし」

「その内貴方も呼ばれるかもですよ？」

「ちよつと用事あるから途中まで一緒にします」

「どうぞお好きに」

全く、やはりこの人は好きになれない。櫛いのりの事も分かつてるのに敢えて突っ掛かって来るし……

等と呟きながら前方で爆発を起こす建造物を尻目に、僕は目的の場所まで脚を運んで行く――

※※※

葬儀社が襲撃を仕掛けて来たタイミングで、ヴォイドゲノムの力を発揮し牢から飛び出した。

途中気が付いた人達が発砲してきたが、《王の力》を持った今の私にはまるで止まっているようにさえ見え、軽く受け流してから反撃に出ると、皆冗談みみたいに弾き飛んでいく。

やっぱり、《王の力》は危ないものだ。どうして集はコレを私に渡そうと思ったのか、理由を聞いた今でもよく分からない。

その後、これまた集から得た情報で、城戸研二を回収し、これから集が指定した場所へと赴く。

どうやらGHQからも見つかり辛いルートを教えてくれるらしく、その道ならば直ぐにでも葬儀社と合流出来ると言うのだ。

ここまでしてもらって、今更彼に関して警戒などしていない。むしろこれからの彼を思うと何だか無性に胸がズキズキするくらいだ。

(何だろう、この感じ……?)

よく分からない思いに悩むが、少なくとも敵に向けるモノでは無いという自覚くらいはある。それがいけないという事も……。

だって、涯がそういつてたから。

エンドレイヴすら置き去りにする速度のなかで、いのりは必死に自分の思いが何なのか思考を重ねるが、その答えは見つからない。

初めて使うというのに、《王の力》は彼女によく馴染み、そして敵を制圧する。

それも当然なのかもしれない。何せヴォイドとは自分の心だ。使用者にとって、経験という感じも無くとも親しみぐらいなら持つのだ

ろう。

行く手に4機のエンドレイヴが現れた。

いのりは思考を切り替えると、即座に手に持った大剣を縦に振って衝撃波を発生させた。

暴力的なまでの威力と速度を兼ねた斬撃は為す術もなく目標物を鉄屑へと還す。

2機重なった所を狙ったのだが、破壊できたのは1機だけ。先に来ていたやつは壊れることこそ無かったが回避は間に合わず、体を翻した時に右肩から先の部位を失ったようだ。

「惜しい。先に片付ける」

操縦者がフィードバックの痛みに耐えられなかったのか、小さく蹲った隙を逃さない。直ぐ様進行方向をそのエンドレイヴに変え、軽くぼやいてから止めを討とうとする。

が、その前にもう1機が間に割って入り、残りの1機が横から牽制の為に銃弾を向けてきた。

「邪魔……」

皺一つない眉間にソレを寄せて前の2つと横のを見比べる。一瞬で選択を決めると、大剣を横に掲げて今度はそのまま制止する。

切っ先から衝撃波の盾、ヴォイドエフェクトを展開して攻撃を防ぎ、剣の向きは固定したまま横に薙いだ。

それだけで先程のよりも強烈な一撃が全機に繰り出され、啞然としていた横の一体は反応が遅れて両足を切断、庇っていた1機はやむを得ずと跳躍して躲したのだが、後ろで未だに這いつくばっていたのは敢えなく撃沈した。

更に攻撃は終わらない。予め躲されることを読んでいたいのりが空中で身動きがとれない状態のエンドレイヴに今度は自分から突っ込んだ。

咄嗟に身を翻し回避を試みる、が無駄だ。

その行動すら読んでいたいのりは躲される瞬間に空中でヴォイド

エフェクトを足元に展開し、それを蹴って威力そのままに機体のど真ん中に大剣を突き立てた——！

突然の行動と痛みと金属特有の不快感を撒き散らす中、刃に意識を集中させ、まるで豆腐を切ったかのような軽い手応えで機体を分断させた。

「——ッ！」

思わず息が漏れる。

斬った機体の向こう側から銃弾が向かってきたのだ。

突然の事に焦りりが生じ、ついヴォイドエフェクトを展開するのが遅れた。

そのせいで銃弾が何発か防ぎきれず、内側に入ってきてしまう。

必死に身体を反転させて身を守るが、その内の1発が脚に浅くない傷を負わせ、上手く体重を支えきれず倒れた——

が、相手もまだ終わらない。

いのりが痛みよりも敵を優先させて顔を上げた先には、既に此方を向いている銃口がある。

「クッ!!」

直ぐに剣を間に置いて盾を張ろうとする。が——

「ハイそこまでっ、と」

エンドレイヴに備えられた銃が彼女に火を吹いた瞬間、横から来た何者かがソレを蹴飛ばした——！

ズガガガガガ！

そのせいで発砲口の向きが逸れ、本来私に向かう筈だった銃弾が自分の頭を射ぬいてしまう。

ガガガア……

やがて音は弱まり、そこにいたのは頭部が吹き飛び、完全に機能を停止させられたエンドレイヴだけ——

「あ……」

「大丈夫？ ……じゃないかこれは」

「!?」

突然の光景に私が呆然としてしていると、すぐ近くから聞いたことのある声が耳に届いた。

驚いてバツと顔を上げると、そこには目的の人が困った顔をして立っていた。

「…集?」

「んっ。お待ちせ…ってのも違うか。待ち合わせ場所ここじゃないし」

「…ごめんなさい」

「気にしないでよ。別に待ち合わせなんて会うための手段でしかないんだし。ってか僕も今来たばかりだし」

彼は本当に気にしていないようで、それよりもその眼が私の脚に向けられると酷く沈痛な面持ちで顔をしかめた。

「取り合えず止血だ。いのり、ヴォイドは仕舞って。」

それは目立つから」

「えっ…?… あ、うん」

一瞬何を言われたのか理解できなかったが、言葉を飲み込むと言われた通りヴォイドを仕舞った。

その間に集は私の脚の状態を真剣な眼差しで見つめていた。

「——ッ、——!」

その眼差しと、^み看ている際に触れる手が、恥ずかしくて、でも何故だか凄く嬉しかった。

「傷は深いけど大丈夫だね。暫く休めばすぐ歩けるようになるよ」

「…集」

「ん?」

「ありがとう」

「どう、いたしました?」

テロリストと軍人^{GHQ}

今更ながらに思い出したその関係が何だか面白くて、でも凄く切ない気がしたのは、単なる気のせいだろうか…

※※※

遡ること一刻、乃ち襲撃開始から30分。ここに来て葬儀社は違和感を感じていた。

「計画は順調……いや順調過ぎるな」

そう、計画は何の問題も無く進められている。

渋面を作って思わず吐露してしまうくらいに、アツサリ運んでしまっているのだ。

「四分儀、どう思う」

「分かりませんね。罫か…あるいは既に持ち去られてしまった後なのか」

「だが事前の調べだと何も異常は無かったのだろうか？」

「ええ。『奴』の正体は未だ不明ですが、いのり、研二、そしてヴォイドゲノムが外に持ち去られた様子はありませんでした」

「どちらにせよ、『奴』が動かない理由は不明だ。各自警戒を最大限に保ちながら進めてくれ」

『了解！』

四分儀との会話を終えると、溜まっていた二酸化炭素をゆっくり吐き出しながらも次の瞬間には思考を切り替える。

1秒先にも戦況が変わってしまうかもしれないこの場で、悠長に示てられる暇は無い。

それは襲撃している向こうに、嘗ての親友が居たとしてもだ。

今まさに己の部隊と戦っているかもしれない。それでも彼——恙神 涯は躊躇わない。自分は彼等の命を背負っているのだ。半端な気持ちなど微塵も無い、許されない。

袂を分かったというのなら、自分は全身全力で彼を越えるしかない。幼い頃の憧れで、彼にとつてのヒーローであったとしても。

特に『奴』——『神速』がいる現場ではそれが命取りだ。

神速——世界中の犯罪者の間で怖れられる人物の呼称。何年か前にその名が出されて以来、瞬く間に広がりを見せて世界を駆け巡った。

年齢不明 性別不明 出身地不明の unknown。

黒コートにフードといったおおよそらしからぬ形のため、軍人と云って良いのかすら不明だ。

解っている事はたったの2つだけ。

一つ、どんな危険な任務であっても常に単独行動。

一つ、その名の通り、とにかく速く、そして強い。

目撃例が非常に少なく、神出鬼没であるがその実力は折り紙つきだ。

曰く、米国一の密輸組織を壊滅に追いやったとか

曰く、犯罪大国にある違法組織をこれまた壊滅に追いやったとか。か。

他にも戦争が激化の一途を辿ろうとしているのをその力を持って治めたとか、数十年続いた紛争を片付けた、なんて事もよく聞く。

「奴が動く時こそ物語の終わり」

これは『神速』に滅ぼされたとある組織のボスが吐いた言葉だ。

「奴に目を付けられたら為す術もなく殺られる」と言外に伝えているこの言葉は、確かに世界の悪党共を戦慄させた。

たった一人で戦局が変わるかもしれない化け物であり、これに対抗するというなら正にヴォイドの力が必要になってくるのだ。

(桜満玄周博士が作ったとされるヴォイドゲノムは全部で3つとされている。内2つは行方不明、残りの1つも米軍が所有していて手が出せなかったが：まさかそれを日本に持って来てくれるとはな)

そう、葬儀社が今まで計画に踏み込めなかったのは、米国という鉄壁の守りに囲われていたからだ。

だがそれも一つは日本へと移された。『神速』が護衛付きで——
(問題は無かった。ツグミがハッキングで奴のいない時間を割り出し、その時間帯に回収できる——筈だった)

そう、準備の段階では計画は完璧だった。『神速』は良い意味でも悪い意味でも軍人ではなかったので、隙を逃さなかった。それに皆が従い、成功する筈だったのだ。

(俺が甘く考えすぎていた。奴さえ居なければ楽に終われると楽観視していただけだ)

目を瞑り、息を深く吸い、そして吐く。

(駄目だな、物思いに耽り過ぎていた。皆に注意したそばから……俺もまだまだだ)

集の事で始まった頭の思考を完全に捨て去り自分を戒める。さつき気を抜けていられないと思っていたばかりなので、つい自傷気味に苦笑を溢す。

「!! 涯・レーダーに反応した!これは…白銀の、大剣?」

「何!?!」

待ち望んでいた “変化”

だがそれは、彼すらも予期せぬ不測の事態であった。

※※※

いのりの治療を終えた集達は、集が言っていた『秘密の抜け穴ルト』を使いGHQの目から逃れていた。

「そういうえば、ヴォイドはどうだった?」

「凄かった…と思う。身体が軽くて、頭も冴えてる感じがした」

「成程ね。確かに凄かったし、なによりいのりのヴォイドは戦闘特化って感じだったね」

「ん。威力もスピードも申し分ない」

「でもそれで油断して負傷したのは頂けないね」

「うっ……ごめんなさい」

「……ねえ」

「まあでも初めてにしては上出来かな。一応はエンドレイヴ3機倒してるし」

「…本当に?」

「勿論」

「そっか……ふふっ」

「ねえってば」

「そういえばさ、内のクラスにいのりの大ファンがいるんだけど、今度の新曲楽しみだって言ってたよ」

「…クラス？」ピクツ

「ねえ！」

「うん。何かデビューした時からのファンだって言ってた」

「……集。私の事は知らなかったのに、同じクラスのファンの人は知ってるんだ」

「えっ…いや…ごめん。薦められてたんだけどやることあつて…」

「……集、ソイツ女？」

「おい」

「えっ？ いや、男子だけど」

「なら…良い」ホツ

「？」

「~~~~~ッ！」

「あつ、でも同じ部活のメンバーは全員いのりの事知ってたな。女子二人と男子一人」

「……同じ部活？ 女子二人？」

「うん、名前は祭と花音っていつて…」

「オイ！ さつきから無視すんなダベフツ!?!」

「研二、五月蠅い」ガスツ

「バタンツ

城戸研二は櫛いのりから脳天キックをお見舞いされた。

(勿論無傷な方の脚で)

ちなみに、今のりのりは（本人のさりげない言動のお陰で）集におんぶされており、元々身長が低かった研二の頭を攻撃することくらいは容易い。

研二は集の余っている方の手でズリズリと引き摺らされていた。

「ねえ…集」

「あつ、ハイ！」ビクッ

「また今度：ううん、言ってくれば何時でも聞かせてあげる」

「えっ、本当に？」

「勿論」

「やったね！ 颯太喜ぶぞ。ついでに祭や花音と谷尋も」

「集一人じゃないとダメ」

「えっ、いやでも今何時でも良いって…」

「定員は一名のみ」

「：僕しか聞けないじゃん」

「……………嫌？」シヨボン

「まさか。独り占め出来るって考えたら最高だね」

「集…！」／／／

「じゃあ約束ね。今度のいのりの唄をもっと教えてよ」

「うん」

「俺を無視するんじゃないやねえー！！」

「あつ…」

「研二おはよう」

「『おはよう』じゃねえよ樫テメエ！

　　ってかそこのお前！そもそも俺の事忘れてたダベヘツ!?」

「研二、喧しい」

「ゴフツ…樫、テメエ……………」

「静かにしろ城戸研二。いのりは兎も角、お前は送り届ける必要なん

て無いんだからな」

「あ？ 才、お前その服、GHQ…か？」

「そうだ」

「ちなみにアンチボデイズ副局長」

「なっ!？」

「いのり…それあんまり公表して欲しく無いんだけど」

「……………戦略的情報公開誘導？」

「いや、無いよそんなもの。誘導でも無いし、ただのうっかりだよね」

可哀想な研二。

集は《王の力》を持ついのりには優しいが、それ以外の葬儀社に関しては甘さを見せる必要は無いと考えている。

忘れてはならない。彼はこれでも立派な？軍人だ。

引き摺られたままは嫌だったので集に解放を求めた。

集も重たいのは持ちたくなかったのですぐさま手を離す。

何故そんな奴がいのりと親しげに話しているのか、何で自分達を逃がすような真似をしているのか。

研二には聞きたいことが有るが、自分の立場では二人の間に割り込めないと悟り目的地まで黙って着いていくことにした。

そして暫く歩いていくと、人が一人通れそうな程の狭い穴があり、そこを進んでいけば葬儀社のいる地下通路に出られると集は教えてくれた。

「…何で葬儀社のいる位置を把握してんだよ。これじゃあ奇襲かけ放題じゃんか」

研二の言うことにいのりは同意する。集の能力の高さにはビックリしたし、その気になればここに軍を呼ぶことだって出来る筈だ。色々気になることはあるが、「折角ヴォイドを手に入れたのに使いこなす前にやられちゃったら台無しでしょ？」という言葉で渋々ながら納得するしか無かった。

研二はその言葉に呆然としていたが、いのりの右手にある《王の印》を見て愕然とした。

微妙な空気が場に流れたが、集は用が済んだとばかりに踵を返して去ろうとするが――

「集、待って…！」

「残念だけど時間だ。漸く呼び出しもかけられちゃったしね」

いのりが呼び止める。

が、そう言う彼の右手には携帯らしきものが握られて、画面が青白く光っているのが見えた。

「でも、まだ私集に何もお礼できてない…」

「……勘違いする前に言っとくけどさ」

「えっ?」

それまで何となく優しい雰囲気を放っていた集が目付きを変えていのりを見据える。それに言い様のない恐怖を覚えると共に、ゴクリと唾を飲み込む。

その威圧感をいのりは知っている。初めて会ったときにグエンに向けられていたモノと同じやつだ。ただしその対象は現在のいのり(と研二)に向けられている。

「俺は別にいのり達の味方をしてるんじゃない。俺達の関係はあくまで軍人とテロリストだ。そこを履き違えんなよ」

「う、うん。でも集…」

「助けるのは今回だけだ。次に会った時に俺が『軍人として』動いていたら迷わず殺す」

「!?!」

集の言った事に衝撃を受けた。確かに自分と彼とではそうなる運命にある。忘れていたがこの状況はかなり特殊だ。それこそこうして忠告までしてくれるのだから破格の行動だろう。

だが、面として彼から「殺す」と言われたのが胸に刺さる。自分は彼を少なからず思っていたけど、彼からすれば自分はその程度の相手だと無理矢理に思い出させられた。

「まっ…あくまでも『軍人としてなら』だけだな」

直後、張り詰めていた空気が何事もなかったように霧散する。集が威圧を解いたからだ。いのりと研二は汗を流し、空気が元通りになると同時に研二は四つん這いになって必死に酸素を取り込もうとしていた。牢獄の中で過ごしていた彼にとってこの威圧は耐えられなかったのだろう。

集は構わず視線をいのりに固定したままふつと微笑を浮かべる。

「それまでにはきちんとしてヴォイドを使いこなしておいてよ。今のままじゃ未熟も良いところだ」

そう言うのと今度こそ踵を返して集は行ってしまった。

後に残った二人は暫しボーと立ち尽くしていたが、やがて会話もなくその穴へと入っていった。

しかしいのりは必死に頭を働かせる。

集は何者なのか。どうしてヴォイドを持ち、自分に託したのか。エ
ンドレイヴを生身で倒しえたあの身体能力と全てを見抜いているか
のような洞察力は何なのか。

考えても分からないことだらけだったが、不思議と気分は上がって
いた。

彼の言葉を言い換えると「日常的になら接触しても問題ない」だ。

そして彼と取り付けた些細な約束、「今後も集に唄を聞かせる」とい
うのが決め手となって心を落ち着かせた。

今はまだ無理かもしれない。だけどこれから知っていけば問題は
無いと納得する。

それから数十分後、いのりと研二は無事葬儀社と再開する。